

多職種連携あり方学ぶ

山科 医療系学生らが議論

山科区の京都薬科大と京都橋大で医療者を目指す学生が集い、多職種連携のあり方を学ぶ講座が15日、京都薬科大であった。26人が参加し、在宅医療を望む高齢者のケアに薬剤師、



それぞれの専門性を生かす在宅医療のあり方を話し合う学生たち（山科区で）

看護師、理学療法士がどのように協力すれば最善の医療を提供できるか議論した。

2016年度に始めて7回目。京都薬科大で薬剤師を目指す5年生11人、京都橋大から看護師と理学療法士を目指す4年生15人が参加した。

テーマは、畑で脳梗塞を発症して右の手足がマヒし、軽度の認知症を患いながら妻と暮らす男性（68）の在宅ケア。学生は混成の4チームに分かれ、病状や家族の生活状況を分析し、各職種の専門性を生かす方法を考えた。

京都薬科大の岡下さくらさん（23）ら6人は、男性の身体機能を高めながら、家族の生活の質を保つ方法を話し合った。「できないことより、できることに目を向けることが大事」との考え方を軸に、男性が生きがいを感じていた農作業をリハビリに組み込めないか検討。「患者や家族が医療者を信頼し、安心感を高めるうえで情報共有ノートの活用が効果的」と結論つけた。岡下さんは「他分野の専門用語を理解しながらの議論は難しかった。患者の生きがいをくみ取る重要性を共有できたのが成果」と振り返った。

京都薬科大の今西孝至講師は「医療現場では、様々な医療職の考え方がぶつかりあふ。連携のあり方を考えることは、自分の医療技術を生かす方法を学ぶことでもあり、学生時代に経験することは重要」と話した。